

苦難の中の賛美

大群衆のヒステリックな叫びと権力を振るう役人たちの反ユダヤ人感情という偏見の犠牲となって、パウロとシラスは正当な裁判なしに、公衆の前で裸にされ、激しく鞭打たれ投獄された。背中肉は裂け、血だらけになったまま、足には足枷をはめられて、彼らは獄屋の奥の牢に入れられた。一方において占いの霊に取り憑かれた女奴隷が悪霊の呪縛から解放されるが、多方においてパウロとシラス自身はそのことで今や獄に捕らえられてしまった。何といふ皮肉な運命か！

しかし彼らは決してそれを冷たい運命とは思わなかった。運命と思われる出来事の背後にも神が臨在されることを彼らは知っていた。ルカはこう記している。「真夜中ごろ、パウロとシラスが賛美の歌をうたって神に祈っていると、ほかの囚人たちはこれに聞き入っていた」(16 25)。ここには継続を表す動詞が3つ使われている。「祈り続けた」「賛美し続けた」「聞き続けた」。真夜中の獄屋のこの異様な光景を想像してみよ。からだは血にまみれ、はれあがり、足枷をはめられ、身を伸ばすこともできず動くこともできない状況の中で、彼らは神に祈り、神を賛美しつづけたのである。

この牢獄の出来事は、私たちに大きな慰めと勇気を与える。私たちは日曜日ごとに教会に集まり、心をつにして公同の礼拝を神にささげる。それはキリスト者の生命に満ちた時であり、喜びの時、祝福の時である。しかし、時には病気に苦しみ、或いは家族の不幸に悩み、或いは仕事のいきづまりに直面し、その他予期しない出来事に妨げられて公同の礼拝に行きたくても行けないということがある。

しかし私たちはどのような境遇にあっても、その居る場所で、時には床の上で、時には台所で、時には車の中で神に祈ることができるということ、苦悩のどん底の中で、逆境のただ中で、神に祈り、賛美することができるということ—これは何という大きな慰め、励ましてあろうか。

或る説教者の次のような言葉に深く教えられる。彼は言う「人は幸福があまりに大きいと賛美を忘れる。また、あまりに不幸が大きい時も賛美を忘れてしまう。わたしたちはほどほどの時しか神をたたえない。したがって、そのために、ほどほどしか神の助けを体験しない。ところが今パウロとシラスが獄中で神を賛美したとき、この神賛美に呼応するかのよう、大地震が起こり、彼らは驚くべき神の臨在を体験した。ここで起っている真の奇蹟は地震ではない。逆境のただ中で神の臨在を感じ、その御声を聞き、その御名をあがめ、祈ることができるということこそ、真の奇蹟である」と。

薄暗い獄屋でのパウロとシラスの神への祈りと賛美は他の囚人たちに深い感銘を与えたように見える。彼らはじっとそれに聞き入っていた。ふたりは囚人たちに福音を伝えたであろう。そして私は確信するが、獄吏もまたその一部を聞いていたであろう。地震後、ただちに「先生方、救われるために、わたしは何をなすべきか」と叫ぶその求道の叫びにそのことがよく表れている。神はそのローマ人の獄吏をもとらえ、彼の家族をもとらえ、ご自身の民の中に加えて下さったのである。